気楽なアデレード訪問

氷上澄子・氷上克一記

アデレード空港に着いたのはお昼頃で、タクシーでホテルへ向かいホテルの部屋に落ち着いたのが、午後 2 時頃。会議の登録をする妻と一緒に出かけた。まだ日が高いので、ホテルの近くの様子を見に出かけた。まず、ライト展望台というところへ行って町の様子を眺めることにした。ICWES の会場からは北側を流れるトレンス川を渡ってアデレード競技場を左手に見ていけばすぐたどり着ける。展望台といってもちょっとした丘の上なので、町全体が見わたせるわけではない。途中古い水飲み場があった（写真 1）。1886 年クリスマス・イヴにアデレードの町で火事があったときに、火消しで活躍し殉職した消防士を記念して建てたものだそうだ。

ホテルの前の通りを東へ(右手に）ずっと行くと、ランドル・モールというショッピング街で、車の通行を遮断していわゆる歩行者天国になっているところにつながる。道路の両端に様々な専門店があり、スーパーマーケットも何軒かある。道路の真ん中にも屋台のような店があり、若者がたむろしている。

このランドル・モールの一つ北側の通りに美術館や博物館や植物園がある。博物館は展示物もたくさんあり、とても 1 日では見きれない。オーストラリアの歴史がわかるようになっている。そこで「あやとり」を見つけた(写真 2)。「あやとり」は日本の専売特許かと思っていたが、1929 年に N.B.チンダルという人がオーストラリアに持ち込んだそうだ。植物園には南半球最大といわれる温室がある。2.7A$払って中を見学。さまざまな熱帯植物が茂っていて今にも猿が現れそうな雰囲気。屋外のばら園には残念ながら花はない。今は冬なんだ、と意識させられる。植物園に隣接してワインセンターがあるが、展示も簡単でどこでどんなブドウが取れるということは地図で示している程度だ。きちんと申し込んで団体で来ないと面白くないのかもしれない。植物園や博物館が面しているノーステラスの通りに 1857～1893 年の間州の首相を務めたヘンリー・エアーズの官邸がある。見学しようと訪れたら、ガイドを付けないとだめで、見学は 1 時間ぐらいかかるというのであきらめた。ガイドの話を聞いてもはたして理解できるかどうか不安があったから。

旅行に出る前から楽しみにしていたのが、バロッサ・ヴァレーのワイナリーを訪ねることであった。朝 9 時にホテルに迎えに来てもらい、1 日のバス旅行である。２か所のワイナリーを訪れたが、いまはオフシーズンで作業はしていない。ぶどうが盛んにワインに変身しているときである。でも、ワインは売るほどあるので、ホテルでの楽しみに試飲後に気に入ったシラーズ種の赤ワインを１本購入した。帰りにドイツ風街並みのかわいらしい町、ハーンドルフによって一日のツアーが終わった。

写真 1　水飲み場

写真 2　あやとり

素敵なツーショット

チョコレート店

ランドル・モールのごみ箱

したが、アデレードは地中海性気候日本の夏はオーストラリアでは冬だというので、衣類も冬物を用意
とのことで、日中は 15 度程度で快適な気候であった。今回の旅行では、雨に会わず毎日晴れの天気であったのは幸運であった。

路面電車

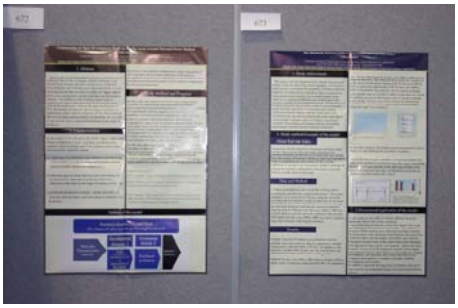
個人発表報告

鈴木千賀

今から４年前。このホームページにも残っているが「女性技術士交流会と日韓技術士会議に参加して」との題目でレポートを書かせて頂いたことがある。ICWES とは異なるのだが、懐かしくなりそれを読み返してみた。当時の私は以下の様に書いている。『多くの女子学生が理系に進み、そして女性技術士・研究者として社会で活躍していくことが未来の日本を強くするのではないでしょうか。』と。

その思いは今も変わらない。その思いのもと、大学に残って教員となった。研究の傍ら、理系若手研究者や学生の育成支援にも励んでいる。最近は、それ以外に大学における海洋研究史の編纂にも代表として関わっているが、ほんの数十年前までは、理系は愚かその歴史の中に女性研究者・技術者の名前はほぼ皆無であった。それが近代日本における研究者・技術士者コミュニティーの姿であったのだと思う。女性の先輩方の「私達の努力のおかげであなた達があるのよ」は、まさにその通りであると思う。前置きが長くなってしまったが私も未来の後輩に向けて、研鑽の努力を惜しんではならないのだと思う。男女関係なく努力した人間が認められる社会であるべきだと考えている。
今回の ICWES には前回に引き続き「個人発表」という形で参加をした。最近は、モデルを用いた海洋環境影響評価だけでなく、火力発電所の廃熱（CO_2放出）や温排水を利用した藻類の育成並びに藻類を用いたバイオエネルギーの創出に力を注いでいる。その進捗をアデレードで披露してきた。

ポスターの前にて



ポスター全景

ところで、火力発電所から空気中へ拡散された CO_2 は長期的にかつ徐々に陸上の CO_2 濃度を高める。海洋における温排水は排水口周辺の局所環境に最大で７℃の水温差を生む急激な影響を及ぼしている。東北関東大震災による福島原発事故に起因し「原子力から再生可能エネルギーへの移行が徐々に進行する」というシナリオを、世の中の動きとして多くの国民が望み始めている今、火力発電所から排出される大規模 CO_2 の固定に加え、海洋に大量に排出されている温排水の利用を想定したシステムの開発が急務である。海外の技術者も日本の復興に向けた技術躍進に熱いまなざしを向けている。原発依存からクリーンエネ

ルギーへの移行の中間段階として、「石炭火力発電のよりクリーンな形での利用（廃熱・余剰 CO2 の利用ならびにバイオエタノール生産）」を重視した研究及びその成果発信を続けていきたい。

話は戻るが、数日前、本団体の木村了氏（兼 INWES-J　事務局長）から″2011 Asia Women Eco-science Forum (2011 AWESF)″におけるスピーカーのお誘いを頂いた。お仲間も幾人か発表される中「日本の女性技術者の底力を世界に知って頂くチャンス」と思い、ICWES に引き続き参加させて頂きたい思いで一杯であった。

実践の場での英会話のブラッシュアップの必要性を感じていた矢先でもあった今回のお声かけには感謝の念で一杯になっている。日程的に本務と重なり、諦めざるをえなかったことはかなり心残りであるが後輩思いの素晴らしい方々がたくさんいる会が女性技術士の会なのだと今回も幸せな気分になった。

シンポジウム会場にて

ガラナイトにて

サイトツアー参加記

千木良美由紀

直前の５月に ICWES15 へ参加することが決まり、7 月 18 日(月)10:00 から開催されるサイトツアー「From Soil to Skin – About Claret Ash Farm」に申し込みました。当日、約束の時刻・約束の場所に出向いてみると、閑散としていて誰もいず、「時刻か場所を間違えたか???」と咄嗟に自分を疑いました。届いたメールのプリントを確認しながら(間違っていませんでしたよ！)しばらく待っていると担当の方がやって来てくれて、開口一番「From Soil to Skin – About Claret Ash Farm はキャンセルされました」とその場で言われ、「代わりに『Australian Rail Track Corporation (ARTC)Australian Rail Track Corporation (ARTC) 』に参加してはいかがですか。すぐバスがでますよ。」とのこと。「えっ、え～？？？」と思いながらも、既に費用も払ってしまっていますし、この感じでは、払い戻してもらうことを『英語で』交渉するのも一苦労だと直感し、にこにこ笑顔で、この「ミステリー・ツアー」に参加することになりました。

バスには私を含めて４人が乗り込み、その日のサイト・ツアー参加者は合計４人だったのだということがわかりました。どおりでキャンセルになるわけです。バスで 15 分ぐらい移動して ARTC に到着、アットホームな雰囲気の中、歓迎していただきました。会議室で役員の方から、ARCT の会社概要の説明を受けた後、事務所にも立ち入らせていただき、実際に稼働している列車の運行システムや管理計画策定の現

アデレードの街の外縁部にある ARTC 社

会議室でお茶と菓子(英国風)付きの説明会

場を見学させていただきました。

ARCT は、現在、サウスオーストラリア、ビクトリア、ウェスタンオーストラリア、ニューサウスウェールズ及びクィーンズランドの10,000km 以上の軌道の管理を行っている会社であるとのことでした。この会社では、バラスト軌道の道床砕石に関して若手の女性技術者が研究を行っていて、詳しく説明してくれました。私には専門外ですので、技術論の詳細を紹介できずに申し訳ありません。

アデレードは、列車の運行システムのネットワーク制御センターに位置付けられているそうです。事務所は、先端的な(と思われる)システム機器(ハードは日本 IT 企業のものでした)を設置した充分な広さのある個室オフィスが合理的に配置され、集中してダイヤグラム作成作業ができるように配慮されていました。日本の事務所の単位面積と比べると悲しくなるものがあります。

ただし、ここでは、ダイヤグラムと言っても、山手線や東西線で通勤している私たちが想像するような「すじ」が目もくらむように密集しているものでは全くなく、大陸の国、オーストラリアの鉄道らしく、1 時間に列車が 1 本あるかないか……といった風情のものでした。

コトの成り行きで、軌道管理会社のシステムを見学させていただくことになりましたが、ここで働いていらっしゃる皆さんに、東西線のダイヤグラムを見せて差し上げたい、その運行システムを紹介したいというのが、私の感想の正直なところです。

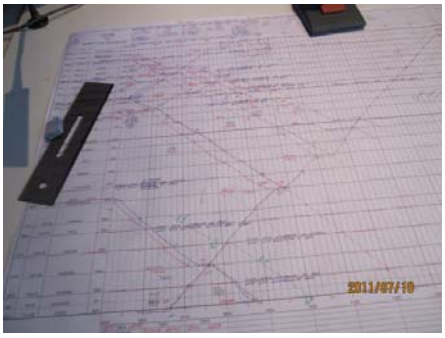
同行した方の中に、オーストラリアの Invited Speaker である Lorie Jones さんがいらっしゃり、とても親切に仲良くしてくださったのがうれしかったです。お嬢さんが日本語を独学で勉強しているとのことで、往きのフライトで読み終えた文庫本を差し上げましたところ、とても喜んでくださいました。

テクニカル・ツアーとしてもよい体験ができましたが、現地の方々とのネットワークが広がることが、旅の一番の魅力だと思います。

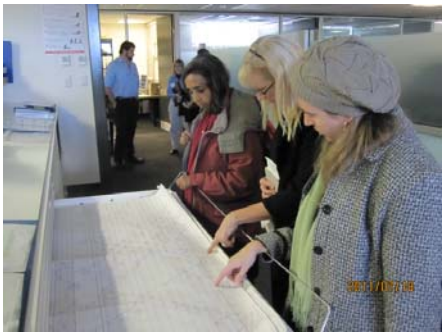
女性職員

(機関車トーマスを飾ってました)

全 6 面の液晶パネル(日本製)



いわゆる「すじ」



図面庫には資料がぎっしり